

人生の学問

昭和四十五年一月二日、矢野仁一先生遂に逝く、行年九十有七歳。

旧臘、おそらく最後と思われる論文が載った『共產黨問題』（第十三卷第八号）を家人から送っていただいたばかりであった。この論文は「理由のわからぬ中共の文化革命」と題し、——私の六つの疑問——と副題がつけられている。昨年の夏に書いたもので、出来たらお目にかかけようといわれていたものであった。はたして、着眼の秀抜、論旨の透徹、しかも文章は若々しいまで雄渾である。内容の当否はともかくとして、これだけの文章が百歳に近い老学者の手になるとは正に当代の奇蹟に近い。私のつたない読後感を書いた書簡がはたして先生の眼に触れることが出来た

今井 富士雄

かどうか。とにかく自分としては精一ぱいの讃辞を捧げた心算である。

「中共の文化大革命を私は毛沢東の世紀の大陰謀だと思うが、その真の意味は毛百歳の後、棺を蓋うて天帝と対面する日がくるまでは、毛主席万歳、万々歳の喚声に掩われてわからないのでないか」という冒頭に続いて六つの疑問を挙げている。いずれも中共の文化革命の現状に対する鋭い批判であり、最後に「劉少奇の、実は共產主義者であつて、資本主義者などでないことを知っている筈の毛として、こんな重刑は本意でなかったらうと思わるるにかかわらずこれを阻止することができなかったとすれば、まことに世紀の残酷物語であるまいか」と結んである。中国近代

政治史の専門家として、長年月に亘ってその生きた現実を学問的に追求されていた先生の眼にも、現代の文化革命の実相はまことに奇怪なものと思われたわけで、そこに世紀の大疑問を投じたまま、長い学徒の生涯を閉ずることになったのである。

昭和四十二年十二月二十三日付の長文の御手紙によれば、「老生儀 聾盲目に深く転た老の至るを覚えながらまだ読書に堪えざるに至らざるため、相変らず中国の革命に史興を覚えつゝ毎日日脚の短きを慨いて嫁や孫たちに笑われて居ります」とあり、またその頃来日したトインビーのことに触れ、「歴史家は現代を語らず況して将来を語らずというわが国の東大や京大の歴史学者に対する一大警鐘とならぬか」となし、しかもトインビーの中国に対する「巨視的」論評は余り大雑把大風呂敷論のように存じますとその矛盾について論じていた。この書簡より一年前にはカルピス社長三島海雲氏の援助によって『中国人民革命史論』が発刊され、それには『岡山史学』より転載された「中国における共産主義の成功についてのトインビー教授の歴史観」が巻末に附録となっているが、我國の学者としてのトインビー批判は当時としては珍しいのではなからうかと思

う。

先生に最後にお目にかかってからもう八年近くなる。昭和三十七年の春、文化史コースの学生と一緒に関西見学旅行をした際に倉敷市まで足を延ばし、当時次男の正幸氏のところで久し振りに先生とお会いすることが出来た。その前から度々会いたいという音信を受けていたのであるが、私の突然の訪問を非常に喜んでくれた。私もまたこれが最後の会見であろうと思ったので、予定を変えて翌朝再びお訪ねすることにした。「自分は今、中国の革命は何故成功したかについて研究している」とこの時最初にいわれたので、私はまず先生の現状即応の勉強振りに驚いた。話は直ぐその内容に触れ、ゆっくりとしかも相手を説得せずんばやまずという調子で続くのだ。「〇〇年の孫文の演説について小島祐馬君にたずねたところ、そういう事実は無いという返事を貰った。ところが台湾で発行された孫文全集にはそれがちゃんと載っている」といって、勉強部屋と思われる隣室から赤い表紙の大冊を持参、わざわざその個所を開いて見せるという有様である。またその時知ったことであるが、先生が疑問を抱けば、無名であろうと若年であろうと相手を構わず質問状を発して解答を求めておられた。この時、先生が若年の頃に学問に向かわれた動機につい

て淡々と語ってくれたが、その内容についてはその後自家版『燕洛間記』にも述べておられる。ただ御本人の口からじかに聞いた時の感銘はまた格別で、真正直な先生の人柄と学問に対する熱情がジーンと胸につたわってくるような気がしたものである。

翌朝再度の訪問の時には前日差し上げたクリストファー・ドウソンの原書の序文を既に読んでおられた。「惜しむらくは昔は原書といえども頁を開けばおよそそこには何を書いているかわかったものだが、この頃は全部に目を通さなければわからなくなった」となげかれた。自分としてはその頃傾倒していた学者のことを先生にも知ってもらいたいのと、お読みになる書籍も倉敷市では入手困難かと思ったりして一本を東京からお土産に持参したわけであるが、九十歳の先生は昔とちつとも変らず、御専門の研究に寸陰を惜しんで御精進されていたわけである。この訪問の後に出版された『中国人民革命史論』の序文には「……十余年前倉敷に移り住むことになってからも、この三書、中でもベルデンを何度読んだか朱筆で圈点を打ったり、傍線を引いたり、感想を注記したり、孔子は易を愛読し、韋編三たび絶つといわれているが、わたくしのベルデンなどはまっぴら紅になっている」とか、「上述の三書を始めこれらの諸書よ

り抜書したり感想を注記したるメモは十余年の歳月を通じてほとんど等身にも及び、自分ながらこれを見て茫然自失するばかりであった。わたくしはいつかはまとめ上げなければならぬと考えながらも、いつまとめることができるか、まとめてどこで出版してもらおうかというあてもなく、毎月毎月、毎日毎日諸書を渉猟したり、メモを取ったりして徒らにメモの堆積を重ねるばかりであった」と書いているが、その頃の勉強振りは驚くばかりである。研究テーマについても「中国の人民革命は、それで世界の歴史は局地的から地球大となり、世界歴史は可能になったから、中国の歴史未曾有の革命であるばかりでなく、原子科学、宇宙科学の開発と並んで二十世紀人類世界最大の偉業であり、トインビー式巨視的史眼を以て、もし人類の歴史始まって以来の五大史実でも七大史実でも列挙するとすれば、少なくともその一に数えることはできるだろう。あるいはこれは燎原の火であり、他は〃星星の火〃であると考えられぬこともない。わたくしは二十世紀に生を享けたる一歴史研究者として、この世界的重大史実に関していささか管蠡の見解を開陳して後世に書き遺すことの機会を与えられたる三島海雲兄の厚情に対して重ねて感謝の意を表する」と書いてあるが、歴史学者としての自信と抱負の大なること

を見る事が出来よう。

矢野先生と親しくして頂くようになったのは四十年前以前、自分がまだ成城高校生の頃で、友人である長男の正一君を京都のお宅に訪ねた時からのことである。自分としては東洋史の大家であり、かつ停年近い京都大学の老教授にこの時会えるとは実は予期していなかったのである。偶然に紹介されて二、三の言葉を交わしているうちに妙なことがきっかけとなって長い議論となってしまった。時勢を慨歎される先生の言葉を聞いて若気の至り、「これからの世の中は自分のためが人のため、人のためが自分のためになるような世の中にならなければ決して良い世の中は来ません」というようなことをいってしまった。「それは宜しくない。おのれの身を正すことから始めなければ」と先生がいうと、「昔からそんなことばかりいっていたが、それでちっとも世の中は良くはならなかったではありませんか」とこちらも簡単に負けていない。最後になって「君は面白い奴だねえ」といって先生が立ち上がるまでには随分時間が経っていた。途中で何度も末っ兄のお嬢さんが「お父さん、お風呂がわいていますよお」と催促に来たのを覚えてゐる。そんなことがあって以来、若い私はこの老先生に本当に気楽に何んでもいえるようになったのである。京都大

学に在学中はもちろん、卒業後研究室に残っていた頃にも良く先生のお宅に伺っては専攻の違いは無視して万般のお話をしたものである。先生と云う存分の話をしてゐるうちに心のわだかまりは不思議に消し飛ぶのであった。

戦時中のことであつたが、先生が文部省の国定教科書の編纂委員になつたことがあつた。その会議に出席して来たという先生に、その時の模様を聞いたことがある。新しい草案についてたずねられたので、「この教科書は大変立派に出来ている。しかしながらあまり日本のことを讃めすぎはしないか、なんでもかんでも日本人のやったことはみな良いことになっているようだが、それはどうかと思う。例えば倭寇のごときは日本人のやった悪いことである。中国の本には彼等の通つたところは一草一木もあますところなしと書いてある。悪いことは悪い、良いことは良いとはつきりと書いてもらいたい。それからまた大切なことがある。歴史を書くには単なる事実の記載をもつて終れりとせず、将来の大きな理想をもつて書いてもらいたい」というようなことをみんなのいる前でいってやつたそうである。そのあとで、「大臣以下、居ならぶ者に肅然として襟を正さしめてやつたよ」と昂然として私に語つた。先生の面目躍如たるものがあるとともに、歴史学に対する根本的な態

度がよく表われているように思われる。

昭和二十年、終戦の年の一月には宮中御講書始めのため御上京、その前年から私も職を文部省教学錬成所に奉じていた時なので、義弟の楠美代議士宅に招待して、先生旧知の福士幸次郎氏等数人とともに一夕のお話を伺うことになった。その日は御進講のあとであったためか大変機嫌よくいろんなことを我々に語ってくれた。京都に亡命して来た中国の文人達のことにも話が及び、清朝末期の人としては羅振玉は忠臣ではなかったとか、何んといっても蒙古で義兵を挙げた升允は忠誠の人であったとかという話が出た。そういえば清末の二絶唱の一つといわれる本人の書いた有名な詩が先生の宅の床の間にかけてあって、それを背にした先生にその意味を説明してもらったことがあった。

その後、久し振りに御上京した時も私を探せと奥さんを探さたて、その時も衆議院にいる義弟に連絡したため漸く連絡がついて馳せ参じた次第であった。この時驚いたことには、満州建国の大立者である工藤忠氏にわざわざ来てもらって既に話を聞かれたということであった。工藤氏といえば郷里の大先輩で、実は父の親友であった。若い時に單身樺太からハルビンに徒歩で渡ったり、北支で部下三万という緑林の王者となったり、後の満州皇帝となるべき人を

箱に入れて敵中白河を下って脱出したという伝奇的な人である。たびたびお会いしているうちに、ますます人物の大きさがわかり、所謂東洋の豪傑というべき人であろうと思つた。ある時、矢野先生のいう清末の忠臣升允のことを私がいつたら、「自分はあの時は升允と行を共にしたのであって、四川、甘肅と一緒にさまよって苦勞をしたものだった」といわれたので、度胆を抜かれたことがあった。とにかく、こういう人物を呼んで親しく話を聞くという態度は単なる机上の学者では出来ないことであろう。その点では矢野先生は実に生きた学問をしている人であるといわなければなるまい。

満州国とソ連の国境について意見を徴され、頼む方の意図に反することを証明したり、戦時中に書かれたある著書は遂に発禁の憂目に会ったのである。こういう行動的な学者が、もしも東京にいたとすれば、必ずや時局に風雲を捲きおこしたのではないかと時々思ったものである。何か政治上の事変があると必ず新しい情報が入っていて、それについての先生の卓抜な意見を聞くのを私は楽しみにしたものである。

停年になって大学を去る時も「大学の教授たる者は学問ばかり出来てもいけない、人間が立派でなければならな

い。人間が立派でも学問が出来なければ資格がない」といつて後継者たるべき教授の推薦をしなかったそうである。これは長男の正一君から聞いた話であるが、先生としては如何にもありそうなことである。

所謂支那学における京都学派の碩学達の間であつて、独立歩の学風を築かれていたのに、遂にその後流が断たれるに至つたことはまことに惜しいことである。

明治の初年頃に生を享けた我國の学者達の間では、学問は即ち經国濟世のためのものであるということは自明のことであつたらしい。したがつて学問のための学問というやうなことはあまり問題にならなかつたかと思われる。

矢野先生より二、三年後に生まれた柳田国男先生にしても、やはり学問は世のため国のためにするものであると考へておられた。比較的初期の著述である講演集『青年と学問』の中から次のやうな注目すべき言葉を拾うことが出来るのもまた偶然ではない。むしろ自然である。

「自分たちの牢く信じて居る所では、学問は結局世の為人の爲で無くてはならぬ」

「私などは根が俗人である為か、学問に世間実益の有無を問はれるのは当然だと思つて居る。さうして結局政治を

改良し得れば、学問の能事了れりと迄考へて居る」

「学問をするならば活きた学問、目の前の学問から片づけて行かねばならぬ」

成城高校に入る前、初めて先生のお宅に伺つた頃にこの本を頂いたのであるが、それを自分でも既に一冊買つていたので、その頃考古学の方で友人になつたばかりの樋口清之君に一冊これを進呈したという思い出がある。その頃は純粹な学問そのものよりも、かえつてこんな文章に若人らしい共鳴と感激を覚えたものである。そしてそのためにも大いに学問をやらなければならぬと思つた。しかしまたその頃は考古学のような現実離れした学問にも妙なあこがれをもつて惹きつけられていたこともたしかである。

日本民俗学の創始者としての先生よりも 広い意味の人生の師の方が私にはびつたりとしていた。成城高校に入つてからでも学問よりはむしろ、いろいろなことをたずね、その答えによつて人生の指針を示してもらふという場合の方が多かつたやうに思われる。その代り、また先生の心情にじかに触れたり、先生らしい考え方を知る機会を得るということにもなつたかと思う。

初めの頃は私の父が医者であることからその後を継ぐやうにとすすめられ、また学問についても必ずしも学者とし

て身を立てることを望まなかった。むしろ何かの仕事につきながらやるべきもののような方をされた。外国では判事などが学問が出来るというようなことをいわれた。そのことも今になって考えてみると、広い国民としての立場と学問のあり方とを結びつけた考えから述べておられたことで、県庁などの役所に郷土を研究する学者の奉職する仕事があれば良いのだがというようなこともいわれた。それによって何人かの学問をする人が生活出来るようになるだろうとのお考えらしい。そういう風の考え方をされる場所があった。

その頃東北地方に銀行のパニックがおきた時もさつそく先生の処へ駆けつけた。同席していた客人と先生との話を聞いているうちに漸く安堵した気持ちになったことを覚えてい。とにかく、先生の書斎の客人は各界方面の人がいろんな話を持ち込んでいたように思われる。それがまた先生自身の学問にも大いに役立ったことであろう。それ等の人達に対する先生の応待振りを傍らで見ているのがまた何んともいえない楽しみであった。そんな時にはおそらく主客ともに先生が一個の民俗学者であるなどとは念頭に思い浮かばなかったことであろう。聞き上手とは先生のこと、その能力は晩年に至るまで殆んど衰えなかった。本当の学

者はその点では年齢をとらないものかも知れない。

他人の名前を引合いに出すのも恐縮であるが、その当時東大生であった江上波夫氏が高校生であった我々に向かって、当時の東大国史学科の教授達を評して、「黒板先生は神道イズムで、辻先生は仏教イズムである」といったことがある。それをそのまま先生に伝えたところ、「そんなものですらない」と言下に答えられた。そのきびしい一言にさすがは先生であると感服したことがあった。これだけの気概があったればこそ民間の学としての民俗学を新たに創始することが出来たのだと思われる。

その後、私は京都大学へ行ったので自然と先生を訪ねる機会も少なく、先生が民俗学へ傾倒されて行った過程については良く知らない。おそらくそれには当時の日本のおかれた多難な情勢が敏感な先生に強く影響を与えたことと思われる。終戦近くなつて私が再び上京した頃には、民俗学研究所に書斎を開放されていた。終戦後しばらく経って、成城大学に奉職することになってからはまた先生のお宅を訪ねることが多くなつた。その時の先生は民俗学に専念される晩年の明け暮れを迎えておられ、研究所の将来と民俗学の学問的運命について毎日思考を凝らしていたように私には見受けられたのである。

日本民俗学は日本のことを日本人が研究するのだから、他の国の人達が研究するものと異なった学問でなければならぬといふのはその頃の先生の常に口にする主張であつた。また民俗学は国史学であつても人類学ではないとはつきりといわれた。そのためか先生から見て西欧派とも見られる学者達に対しては頑固に過ぎると思われるほどのきびしい態度でのぞまれた。この態度は先生の最後まで変わらないのであるが、その心底には明治初年生まれの学人として憂国の至情ともいふべき感情がかくされていたためとも思われる。昔はそんなに学問に対する態度もきびしくなく、どちらかといへば楽しんでゐるようなところが多かったと思われる先生も、晩年に至つてますますはげしい情熱と期待とを民俗学に対して抱くようになったと思われる。

「八十歳になると人間の心理は変わるものだ」とある出版社の社長と一緒に伺つた時いわれたので、それは一体どういふことであるかと思つたことがあつたが、とにかく先生の歩みの息が長く、学問的思考は晩年に至つても絶えることなく続いてゐたと思われぬ。大野晋氏や井上靖氏等と成城で日本語の座談会を開いた時に、「今日は女の人が多いから興奮させられるよ」と冗談をおっしゃつた。仮りに冗談にしても、そういうことをいうのは若い証

拠であると思われる。旧知の井上氏はこの後で私を自宅に招いてくれたが、「実は柳田先生という人はどういふ人か一度見たいので、この座談会に出席することにしたのだ」と語つた。

成城の初等科の先生達と一緒に相当長い間社会科の研究会を続けておられたが、先生は時の流れに素直に應ぜられた人である。戦後の道徳教育にあるいは民俗学が寄与するのではないかと思われ、一時おこりかけたそういう氣運に敏感に反応された氣配をそばで感じたこともあつた。

成城大学にいよいよ民俗学を取り入れた歴史研究のコースが出来るといふ時にも、どういふ名称にすべきかといふと考へられた。民俗学というよりは文化史の方がよしいと判断されてその名称になつたのであるが、そのためには先生は学問の将来について真剣に考へられたものである。ただ先生は根が几帳面一方の学者でないため、その時の情勢や相手によつて非常にうまい発言をなされるのでかえつて誤解や曲解されることも多いようなところがある。

民俗学は先生の最後の学問的希望であつたには違ひないけれども、これのみをもつて日本の歴史の主流と考へておられたわけではない。日頃文献史学を在来史学と称してくさしてはいるが、先生ほど文献を尊重しこれを読まれた人は

少ないのである。また考古学はいたずらに起源癖をもち、また文化の形態ばかりを追うものであるというようなことをいうかと思うと、「何しろ考古学は目に見えるものだから、発展もみんなにわかりやすい」というようなことをいったこともあった。もつともこれは考古学者と一緒に先生のお宅へお連れした時のことであつた。

「先生があんまり考古学の悪口をいうものですから、先生の本を読まないという考古学者がおりますよ」とある時思い切つて私がいった。はたして効果覲面、憤然とした先生が何かいい出そうとして半分立ち上がった。そこで今度は私の方があわて出した。「私には先生のお気持は良くわかりますけれども」というと、先生は口をつぐんでまた坐り直した。すかさず自分でもあの言葉が出たからよかつたものの正に冷汗が出るような場面であつた。しかし、これは造り話ではなかつた。実際我が成城大学の先史考古学者山内清男先生は柳田先生の本を読まないと言言している一人であつた。とにかく柳田先生の考古学ぎらいについては学界に定評があるし、またよく考古学を引き合いに出して悪口をいわれることも確かである。しかし私には先生が考古学はきらいでないという確信があつた。それだからこそ思い切つたことを先生の前でいえたのである。大体引き合

いに良く出されるのは考古学は民俗学と似ているからだと思われる。特に研究方法において非常に近いものがあることはたしかである。先生の名著『海上の道』における南方渡来説にしてもまた『米の問題』にしてもやはり起源論といえないこともなからう。ただ先生の場合は単なる起源や渡来ということでなしにその背景を深く考えておられた。

その点は学問そのものよりもむしろ人間の問題ということになるのかも知れない。私にはむしろ民俗学は文献史学や考古学に対して新興後進の学問であるから、先生が民俗学を激励するために他学をことさらに強く批難したとしか思われないのである。その点になるとかく言葉の表面のみを自分の都合のよいように受け取り、資料を狭く限定しておいてそればかりに閉じこもつたり、常民の文化を研究することがあたかも内容的にも価値があるように思い込んでいる危険がかえつておそろしい。

文献史学は文書記録の文字、考古学は遺物遺跡の有形物を資料とするものであるのに対して、民俗学は無形の民間伝承を主として資料とする点に特質があることをわきまえて、本来の大きな歴史学の立場からそれぞれの役割を改めて考え直し、各学問の相互の關係および総合の問題を研究すべきものと思われる。そして専門分化の弊害を早く脱却

しなければならぬ段階に既に来ているかと思う。

柳田先生はおそらく民俗学を単なる資料学とは考えておられなかったことはたしかである。それは目、耳、心の深淺によつて採集の分類としておられることによつても明らかである。したがつて、コトバを主とする無形資料の学というよりはむしろ現在学としての性格を重んじていたように思われる。たしかにその点になると民俗学は新しい主体的な歴史学のための突破口をなすものと思われる。その代り現在における旧習旧風のみをたずねるという後向き姿勢について深刻な反省を必要とすることになる。また対象についてもこれまで顧みられなかった一般庶民の日常生活にのみ着目してそれで満足するわけにもゆかないことになる。それを果たして民俗学という名で呼ぶべきかどうか、もこれからの問題であるかと思う。

昭和三十年十二月二十五日の研究会の後で先生が、「民俗学は史学のうちであるかうぢでないか、君達はまずそれから決めてかからなければいけない」といわれ、「私は国史の一部であると思う。石田君の説には反対である」とはげしい口調で、石田英一郎氏の民俗学は人類学に入るべきであるという説を反駁された光景が私には忘れられない。しかもその後で興奮して述べられた数々の言葉は日本民俗

学の将来に対する重要な指針を含んでいるように思われた。「願いのかなえられないことを悲願という。日本では昔から思いが残れば幽霊になつて出るという。このあたりに民俗学研究所があつたといわれるようにならぬものでもない」。私はこのはげしい言葉を聞いて首を挙げる事が出来なかつた。このことがあつてから先生はまことに穏かな好々爺に急になられたように私には思われたのである。晩年のある日、先生は成城の柳田文庫の書庫の一隅でつぶやかれたことがある。「神仏習合というけれども、日本思想史としてはどうも神の方に主体があるように思われてきた」。

いつまでもこれという専門の決まらない私に向かつて、「君は何をやつてもかまわぬが、日本のことだけはやつてくれよ」と頼むかのような調子でいわれた言葉は忘れられない。またその後になつて、日本のことを研究するつもりですという、「そうだろう君、歴史を研究する者にとつて、日本ほど面白いところはないだろう」といわれた。如何にも同意をうながすような先生の言葉には、今頃になつて本当に日本のことが面白くなつたともいうような新鮮な響きがこもつていた。

国学院大学の日本文化研究所の平井直房氏から聞いた話

であるが、「日本の神道を宗教学的に研究するつもりです」と柳田先生にいったところ、「宗教学では日本の神道はわからない」といわれたそうである。それで幾ら宗教学のことを説明しても、先生はそれをあえて肯んじようとなさらなかったそうである。

「日本はキリスト教になるまい」とある時つぶやかれた先生の一言は、私にいろんなことを考えさせるのである。

柳田先生にしても矢野先生にしても、あるいは始めから純粹の学問畑で育った学者とはいえないかも知れない。それでこんなに人間味の豊かな人生の師ともいふべき学者になつたのではないかと思うこともある。

柳田先生は大学で講義をしたことはあるだろうが、所謂専任の教師となつて生活されたことはない。元来は法学部出身の官吏として出発され、一時新聞界に入られたわけであるが、それだけに学問もまた常に現実を離れなかつたのかも知れない。

矢野先生は若い頃中国に渡つて、進士の試験の制度に代つた青年官吏養成機関において教育に従事された。この時の体験が先生の中国問題に対する時局即応の実践的な学問の態度を決定的にしたといえるだろう。なおまた京都大学

の同僚にはやはり支那学の大家内藤湖南先生がおられる。高等の学歴を有せず新聞界から迎えられた人である。その「支那論」を読んでいると頭の中に自然と如何にすべきかという考えが浮かぶような気がしてくる。自分流の支那論を福士幸次郎先生に申し上げて、それは湖南説であろうと笑われたことがあつた。この頃の大家は随分と広い見識をあらゆる方面に持っていたことは驚くばかりである。しかも専門といわれる方面においてもまた立派な業績を残されている。

人生のための学問か、学問のための学問かと問われるならば、これ等の人達は正に人生のために学問をした人といわなければなるまい。またそれだからこそその学問もまた精彩があつたのだといえるような氣もする。しかも不思議に明治の初年に生まれた人達である。このことは日本の学術史の上からも重要な問題として取り上げるべきであると思われる。現在の学問の在り方は良い意味ではますます厳密になり精細になつた。その代り、また貴重な東洋の伝統が失われつつあるような氣がしないでもない。西欧と違つて東洋では学問より学問へというよりもむしろ人より人へと学問が伝わる伝統が古来よりあつたように思われる。それが人生のための学問であつたからである。